

「東北うたの本」と戦後の子ども —新しい子どもの歌作りの過程の考察と聴取世代へのアンケート調査を通して—

"Tohoku Uta no Hon" - the radio program and its effect on children of the post-war period

嶋田 由美
SHIMADA Yumi
(和歌山大学教育学部)

本研究は、筆者自身の先行研究「『東北うたの本』と仙台放送児童合唱団」の研究成果を引き継いで推進したものである。先行研究では、「東北うたの本」の活動を、学校教育という視点を中心として考察を行ったが、その過程で、仙台における戦前からの児童文化育成の活動を基盤としていることが明らかとなった。そこで本研究では、「おてんとさん」の現会長である富田博氏への聞き取り結果や資料を用い、当地の文化的土壌との関連性を考慮しながら、「東北うたの本」の活動開始前後の状況を明らかにすることを第一の目的とした。同時に、この番組の聴取世代へのアンケート調査を実施し、戦後復興期における子どもの新しい歌作り、即ち、「東北うたの本」の活動の意義について考察したものである。

キーワード：「東北うたの本」、児童文化、「おてんとさん」、「東北文芸協会」、仙台中央放送局

1. はじめに

戦後復興期には、青少年の文化振興のために各地でさまざまな取組みがされた。特に仙台で起こった新しい子どもの歌の創作活動は、ラジオ番組「東北うたの本」を中心として、学校、放送局、文化人という三者が協働して行われ、その後の学校音楽教育にも教材や歌声という視点で大きな影響を及ぼすものとなった。筆者は先行研究、「『東北うたの本』と仙台放送児童合唱団」において、その番組開始期の様子とこの番組で作られた曲が音楽科教材として使用されていく過程などを、音楽教育関係者や合唱団員への聞き取りを交えながら考察を行った。そして、先述の三者が「戦後の子どもに新しい歌を提供する」という共通の思いのもとに、この活動に取り組み、この活動から生まれた作品が教科書教材となり、またここでの発声がその後の児童合唱のひとつのモデルとなったことで、結果的に戦後の音楽教育の進むべき道筋をつけたことを明らかにした¹⁾。この先行研究はあくまで学校教育という視点からの考察が中心であり、この番組開始以降の音楽科教育に及ぼした影響という視点に研究の力点が置かれたものであった。勿論、拙稿では、この番組を生み出すに至った当時の仙台における児童文化の実態にも触れてはいるが、研究を推進するに従って、番組編成に至る過程での仙台における文化人の動向にも着目

し、全体的な文化的土壌を見据えながら、この活動の意義を探る必要性を感じ始めた。

このような課題意識から、本研究では、当地における児童文化育成のために精力的な活動を行っていた「おてんとさん」の流れを汲みながら戦後にこの「東北うたの本」の活動が開始される前後の状況を明らかにすることを第一の目的とするものである。そして、仙台から発せられたこの活動が、放送番組によって東北一円に波及する様子を考察し、かつ、当時、この番組を聴取した世代へのアンケート調査を通して、戦後復興期における子どもに「東北うたの本」の番組がもたらした意義について考察するものである。

2. 「東北うたの本」の番組開始

2.1. 「東北文芸協会」の発足

1921（大正10）年に設立された同人社「おてんとさん社」での活動が、この地での戦後にまで及ぶ子どもの文化育成活動の素地を作ったことを、前述の先行研究で指摘しておいたが、本稿ではこれらの素地の上に、実際に「東北うたの本」の番組が編成されるに至る過程について詳細な検討を加えることとする。

本研究に際しては、「おてんとさん」の現会長である富田博（敬称略）から、終戦直後の仙台における児童文化再興へ向けた迅速な動きや関係者について、多

くの情報や資料を提供して頂くことができた。そこで本項では富田の証言や当時の新聞資料などをもとに、まず番組創成の当時の詳細な状況を明確にすることにつとめる。

富田は、「おてんとさん児童文化講座」の講演において、1945（昭和20）年10月末頃に、かつて「おてんとさん社」を創設した天江富弥から「何とか早く子どものためにいい歌を作らなければならない」という相談を持ちかけられたことを明らかにしている²⁾。丁度、同時期の10月中旬には既に、東北帝大において「東北文芸協会」設立の相談会も設けられていたが³⁾、翌11月4日には、「東北文芸協会」が正式に発足した⁴⁾。この会には、会長の土居光知をはじめとして、仙台を拠点とする多くの文学者、劇作家、教育者、新聞や放送の報道関係者が参画していたことが特徴的である。特に、仙台中央放送局放送部長の大川茂が「幹事」として関わっていた点は、後の「東北うたの本」の放送番組に繋がるものとして特記すべきであろう。

この「東北文芸協会」は、その設立の様子が「正しき世界観へ」という見出しで新聞報道されたように⁵⁾、戦争勃発後の「文化的領域まで国家的統制が及んで、戦争遂行協力体制の結成が強制された」⁶⁾時代からの「東北における文芸愛好者」⁷⁾による文芸復興を目指すものであった。この頃、先述の仙台中央放送局内でも、先述の大川を中心として、「官製放送を脱却」⁸⁾して新しい番組編成に東北色を盛り込む動きが顕著となってきた。

2.2. 「小国民歌詞募集」⁹⁾ から「東北うたの本」番組開始へ

このような東北の文芸復興の動きの中で、必然のように東北の子どもの歌の復興についても新しい胎動が見られた。富田はこのあたりの事情について、

その頃（筆者注：東北文芸協会設立の頃）、天江さんの知り合いであるNHKの大川放送部長、茂木課長さんから「少国民の歌」を作ってくれないかという依頼が協会にありました。そこで文芸協会では「少国民の歌」の歌詞を一般から募集することになり、委員長に短歌の伊達宗雄先生、委員に大川放送部長と私、東北大学の北住敏夫先生、飯野哲二先生、石井昌光先生、刈田仁さん、佐藤長助さんらが、文芸協会とNHKとの合同で委員会をもって始めました。あつという間の早さでした。¹⁰⁾

と語っている。「東北文芸協会『覚え書』」にも、この委員の決定について、同年11月25日として、

会員懇談座談会（中略）

一、小国民歌詞募集の件を促進するための委員を決定。委員長伊達、委員、大川、富田、北住、石井、飯野、刈田仁、佐藤長助、平井（河北）¹¹⁾

と記されている。富田自身も「あつという間の早さで

した」と語っているように、東北文芸協会発足の同月中に、「小国民歌詞募集」の委員会が設立されたこと背景に、戦前からの仙台における児童文化活動の熟成度が見られるし、同時に、新しい子どもの歌づくりが如何に渴望されていたかが如実に窺える。

富田の記録によれば、委員会は1945（昭和20）年の12月9日と23日に2回にわたって行われ、早速に歌詞の募集を開始した¹²⁾。しかしながら募集期間が極めて短かったこともあり、そのまま発表できるような作品が集まらなかったため、翌年1月12日に開催された委員会では、宮澤孝子の応募作品に永野為武（小名木滋）が補作し¹³⁾、福井文彦が作曲をして、「みんな元気な私達」という曲名で「東北少国民歌」の最初の作品として発表することとなった¹⁴⁾。

この最初の作品発表は、1946（昭和21）年1月27日の日曜日に仙台市立上杉山通小学校を会場として行われた¹⁵⁾。当日は、富田自身も午前8時半に同校へ赴き、この発表会に同席したことが、当時の日記に記されているとのことであるが、当日はおそらく歌詞募集に関わった委員のみならず、東北文芸協会や市内の学校関係者など多くの出席があったものと推察される。

当日の『河北新報』のラジオ番組欄には、

◇9・15（仙）東北少国民歌「みんな元気な私たち」
発表音楽会△歌のけいこ指導・福井文彦△ピアノ独奏・安達久世他¹⁶⁾

と記載されているが、富田によると、作曲者福井の指揮、歌唱は同校児童、伴奏も同校教諭によって演奏されたようである。

実は、前年暮れには、仙台中央放送局内に、その後、「東北うたの本」の番組で活躍する仙台放送児童合唱団が既に組織され、その様子が、

仙台中央放送局に可愛い合唱団生—今まで少年少女の皆様へ贈る劇や唱歌が少なかったので同局では市内各校の四年、五年生から各三名宛を選抜し二十名の「仙台放送児童合唱団」を編成し海鉾義美さんの指導の下に練習を開始し明春早々からデヴエーする。¹⁷⁾

と報じられていたが、この最初の作品発表音楽会ではまだ仙台放送児童合唱団は出演していなかったようである。1946（昭和21）年2月になると、ラジオ欄には「東北少国民の歌」のタイトルが見えるが¹⁸⁾、仙台放送児童合唱団の名称がラジオ欄で確認できるのは、2月10日付けの「唱歌と童謡」と題する番組が初めてである¹⁹⁾。しかし、それ以前にも「仙台少国民唱歌隊」²⁰⁾や「荒町国民学校児童」²¹⁾の歌唱による番組が放送されていたことから、終戦の年、即ち1945年の暮には、仙台中央放送局から既に、仙台市内の子どもの歌声が放送され、それが「東北少国民歌」創作の活動と相俟って「東北うたの本」の番組開始の気運を醸成していたと言える。当初の「東北少国民歌」や「東北少国民の

歌」という名称は、やがて「歌のおけいこ」などのタイトルを経て、最終的に「東北うたの本」という番組名に確定されていった。

3. 番組「東北うたの本」が東北各県の子どもの音楽文化に及ぼした影響

このようにして開始された「東北うたの本」の番組は、次第に毎週、放送されるようになっていったが、この番組は放送開始とほぼ同時に、東北各県にも配信されたことから、この地方全般の子どもの歌を考える活動に啓蒙的な存在となっていたと推察される。

例えば、岩手県では1946（昭和21）年2月の段階で既に澤崎定之が、「過般東東北六県の民謡と童謡が次々に放送されてきて」²²⁾と語っていたし、当地では『山形童謡作品集』²³⁾という番組名も見られたが、おそらく仙台の動向に倣ってのものではなかったかと思われる。

一方、『東奥日報』には、1947（昭和22）年1月に既に、「5・15歌のおけいこ『ドントまつり』」という番組名が見られ²⁴⁾、6月頃になると、「HKうたの本」という番組名が隔週のようにラジオ欄に見られる²⁵⁾。従って、この時期に青森地方でも多くの子どもが「東北うたの本」の番組を聴取していたと推察される。

このように「東北うたの本」の放送が、東北各県に配信されることによって、ここで放送される歌が子どもに届けられ、東北の子どものための新しい歌作りという当初の目的が達成されたことと同時に、もう一点、長期的な視野にたつてこの番組を考えた時に、戦後の音楽教育にとって番組が果たした役割として、この地方における児童合唱団の活動の活性化に大きな影響を及ぼした点を指摘しておきたい。

この点に関し、東北六県の中でも、仙台からの影響を一番強く受けたのは、山形県の酒田地方であった。酒田市では、1951（昭和26）年7月に、社会教育の一端として「音楽子ども会」が発足し、同時にそれが酒田放送児童合唱団となって、同年8月には早速、ラジオの初放送を行っていたが²⁶⁾、昭和30年代には仙台放送児童合唱団との交流も盛んになり、演奏会に賛助出演をしたり、双方のテレビ局にも出演をしていたようである²⁷⁾。

番組開始直後から、「東北うたの本」の担当ディレクターとしてその最期まで番組作りに関わっていた半沢和郎は筆者のインタビューの中で、『東北うたの本』の曲集を各県下の諸学校へ売り込むことに懸命であったと語っているが²⁸⁾、放送局や学校関係者が一体となったこうした積極的な取組みが、「東北うたの本」という番組を長期間にわたって放送し続けることの原動力となり、またこの番組を通じた仙台の子どもの歌声を合唱教育の一つのモデルとして東北各県に広く認

めさせることに繋がったと言える。

4. 「東北うたの本」を聴いた子どもたち

4.1. 聴取世代へのアンケート調査

ではこの時期に子ども時代を過ごした世代はどのようにこの番組を聴取していたのであろうか。この点に関し、本研究では聴取世代を中心としてアンケート調査を実施した。アンケートは2007（平成19）年10月20日に仙台市戦災復興記念館ホールで開催された、仙台放送児童合唱団の元団員で作っているHKジュニアコーラスO.G会の結成30周年記念コンサートでプログラムに挟んで配布し（聴衆約250名）、コンサート終了後に会場出口で回収するという方法で行った。中には会場で書ききれずに後日、送付して下さった方もいたが、それらの回答を含めて合計で120名から回答を得ることができた。

配布したアンケートの項目は以下の通りである。

- 1) 性別
- 2) 年齢
- 3) 小中学校を過ごした地域
- 4) 「東北うたの本」のラジオ番組聴取経験の有無と聴取を記憶している曲名
- 5) 小中学校時代に学校で「東北うたの本」の曲を学習した経験の有無と学習した曲名
- 6) 「東北うたの本」以外の子ども時代の懐かしい曲名
- 7) 「東北うたの本」所載の曲で日頃口ずさんでいる曲名
- 8) 「東北うたの本」の放送や曲についての思い出

このコンサートの演奏団体自体が、「東北うたの本」の番組と深く関わっていたこともあり、当日の来場者の多くは、「東北うたの本」に良い思い出や強い印象を持っていると思われる。従って、ここでのアンケート結果は、そうした点を加味しながら検討すべきであると考え、本項では上記の各項目のうち、4)、5)、及び8) について考察を加えることとする。

4.2. 「東北うたの本」の聴取経験と曲名

回答を得られた120名のうち約100名が60歳代以上で、時代的にこの番組の聴取が可能な世代であった。また小中学校時代を宮城県で過ごした人は全体の8割近くであり、やはりその中に聴取経験の有る人が多く見られたが、全体としては約7割の人に番組の聴取経験があった。問4で聴取経験が「ある」と答えた人の、聴取の記憶のある曲名は、表1) のとおりである。やはり、「仲よしの歌」と「春のあしおと」の記憶が双壁であるが、「おくれ雁」「ワンガマハシ」「かっこう」などの曲名に、東北の子どものための歌作りという「東北うたの本」の活動の趣旨が反映されていると考えられる。

資料1) 問8 「東北うたの本」の番組や曲についての思い出

1. 亡母が我が家に嫁ぐ前、仙台立町小に勤務しておりました。その時に指導の先生が、前の指揮者、海鋒先生でしたそうです。そのような事があって私たち姉妹は歌が大好きです。東北うたの本は母と一緒に歌っておりました。
2. 東北うたの本との関わりは4年生の冬だったと思います。来年になると新憲法発布があるので記念に制定された歌だとして「育てる役目は私たち」を学校で教えられました。教科書の文部省唱歌とは随分雰囲気が違うなと感じました。でもこの「育てる役目は私たち」よりもその後で教えられた「みんな元気な私達」「仲よしの歌」の方が自然に感情導入ができて好ましく思っております。6年生の時、11月末から担任の先生は戦災にあわなかった級友の広い家の一間を借りて6時～9時頃まで私立中学校（中高一貫校）受験の補習をして下さいました。冬の夕方、会場近くの親戚の家で夕食をとっている時、ラジオから聞えてくる「東北うたの本」のメロディは、(受験) (早い夕暮れ) (暗い帰り道)などで暗くなりそうな心をなぐさめてくれた思い出となっています。
3. 姉が団員だったからいつも聴いていた。小野寺禮子さんの独唱の声が今でも残っている。
4. 姉が団員だったのでよく家で歌っていたので聴いていた。演奏会にきた時は最後に皆で歌うので私も歌えます。
5. 夕方、ラジオから流れる歌は唯一の楽しみでした。
6. ラジオから流れてくる「東北うたの本」はテレビも本もなかったのでラジオの前でかじりついて歌詞を書いて覚えたものです。
7. その昔、福島県の郡山と仙台ははるかに遠い地でした。夕方、ラジオから流れてくる「東北うたの本」は、子ども心に楽しみの一つでした。祖母がいて、父母がいて、7人の子ども達、その大家族のお茶の間が思い出されます。
8. 必ずラジオの前で聴いていました。「独唱 小野寺禮子」というアナウンサーの紹介が印象的でした。
9. 一番はじめに覚えた「みんな元気な私達」から、夕方ラジオの放送が楽しみで、家中でラジオに耳を傾けました。どの歌にも思い出がありますが、私にとりまして「東北うたの本」は宝石に等しい宝物です。
10. 記憶が定かではありませんが、とてもきれいな歌声にひかれました。はじめて耳にする世界でした。小学校の担任の先生が、音楽が大好きな先生であったこともあり、NHK弘前放送児童合唱団に入り、その後もずっと歌い続けています。
11. ラジオで歌が流れると一緒に口ずさみ、だんだん声も大きくなり、その風景を思い出しながらうきうきした気持ちになりました。当時を思い出しながら今は遠く離れた孫と電話で一緒に歌っています。「東北うたの本」の全盛時代に育ちましたので、ラジオから流れる歌をいつも口ずさんでおりました。学校で独唱する人もよくこの中から歌っておりました。
12. 放送時間になると父が必ず声をかけてくれたものでした。父は歌が好きで、口笛伴奏入りでした。ちなみに父は自宅にて一日中、ラジオと一緒に仕事をしてました。
13. 曲に合わせて3歳下の弟と歌いながら踊った事、普段けんかばかりしていたのですが・・・。
14. 入団したばかりの年、ストーブで焼き芋を焼いて下さった小学校の先生が、居残りでオルガンで教えてくれた事が思い出されます。「東北うたの本」の何曲か、今、孫達が歌ってます。
15. 戦後3年後に母を亡くし、夕方のラジオの時間が待ち遠しくてかじりついてた。唇に歌を持ち、嵐がこようが平気じゃないかと心にきかせながら童謡を歌いつづけています。
16. 全国児童コンクール（東北大会）第2回の時、上杉小学校（私は6年生）で二等になり、ラジオで放送した事が73年前でした。
17. 姉妹で夏の夕暮れに頭をならべ寝ころんで、夕涼みしながら合唱してました。（小3～4年頃）
小学校6年の秋、東六小で市内小学校「劇」のコンクールがあり、端役で出演、3位入賞。終わりに全員で合唱した曲は「仲よしの歌」か「みんな元気な私達」のどちらかだったはず。
18. 終戦後、ラジオで夕方、「東北うたの本」を聴くのが楽しみでした。当時が懐かしく思い出されます。
19. 小学生時代、ラジオから流れてくる「東北うたの本」の色々、懐かしく、楽しい思い出です。
20. 海鋒先生のご指導のお声が懐かしく思い出されます。
21. 「東北うたの本」と聞くだけで、幼少の頃の夕暮れ時の情景が思い出されて、何とも言えない懐かしい気持ちになります。
22. 「春の足おと」「仲よしの歌」を子ども達に教え、一緒に楽しく歌った。NHK合唱コンクール（当時）の自由曲で歌ったり、音楽集会で合唱をした。
23. 小学校の講堂で、朝礼の時に歌いました。「仲よしの歌」、涙が出るくらい懐かしい歌です。
24. 生放送だったので番組が終わるまで大変緊張していました。（元合唱団員）

25. これによって優しい気持ち、自然を愛する気持ちが培われたと確信します。少女時代の宝物で、今もです。富田先生はじめ、ヘキさん、天江のおんちゃんらは郷土の誇りです。今の学校でもたくさん歌って欲しいです。
26. 現代の子ども達に歌ってもらいたいですね。
27. 趣味のコーラスで「東北うたの本」の中の曲を四季折々に歌って楽しんでいます。最近孫が小学校で「仲よしの歌」を習ってきたので一緒に歌っています。自然の中の風景や季節感がいっぱいのかわいい歌がたくさんあり、大好きです。
28. 戦後の混乱期でラジオも故障が多く、また、欠食児童で「鐘の鳴る丘」を自分のようにラジオで聴き、映画化されたものを親に連れて行って貰いました。
29. 今の子ども達にこのような歌を教えたらどんなに幸せか。
30. 夕方、棚の上のラジオから流れる「東北うたの本」の時間が来るのを楽しみに待ち、頭上から聞こえる歌を正座して一緒に口ずさみ、放送終了後も覚えた歌を何度も復唱してました。毎年このコンサートに来るたび、幼き日のことを思い出しながら涙して聴いております。
31. 南材小時代、合唱コンクールで全国一になった事、曾我先生、三浦先生に講堂で全員練習した事、菅野さんの独唱も学芸会等で聞きました。

記述はアンケートに記されたママ。

設問に対して若干内容が異なる記述もあるが資料として、記入された分を全部掲載する。

4.3. 『東北うたの本』の学校での学習経験と曲名

小中学校時代に『東北うたの本』所載の各曲を学校で学習した経験については、回答者120名のうち、41名が「ある」と回答している。学習した記憶のある曲名については表2) に示すとおりである。やはりここからも「仲よしの歌」と「春のあしおと」が、学校で扱われるケースが多かったことがわかる。この両曲は、昭和30年代から40年代にかけて教育出版株式会社等の音楽科教科書に掲載されていた曲でもあり、そのこともこの結果と関係があるように思われる。しかし、それ以上に、この二曲は「東北うたの本」の代表的な曲として当時から番組や学校で繰り返し歌われてきたものと推察される。

問8の自由記述欄に、

来年になると新憲法発布があるので記念に制定された歌だとして「育てる役目は私たち」を学校で教えられました。(資料1の自由記述2 () 内以下同様) という思い出も記されていたが、一部の学校では「東北うたの本」がこのような使われ方をされていたようである。

4.4. 「東北うたの本」の番組や曲についての思い出

自由記述で問うたこの設問に関しては、資料1) に示すように、合計で31名の記述を得られた。

これらの思い出に共通なことは、

テレビも本もなかったのでラジオの前でかじりついて歌詞を書いて覚えたものです。(6)

放送終了後も覚えた歌を何度も復唱してました。(30)

というように、戦後復興期の遊びが何もない時代にラ

ジオから流れてくる新しい歌を待ち望む子どもたちの姿である。放送開始当時は、ちょうど、用紙の不足のため教科書配布にも遅れが出ることが懸念されていた時代でもあり²⁹⁾、このような「何もない時代」にあってラジオから聴かれる歌声は子ども心にも鮮烈な思い出となって記憶されたと推察される。

また問8の自由記述の中には、

一番はじめに覚えた「みんな元気な私達」から、夕方ラジオの放送が楽しみで、家中でラジオに耳を傾けました。(9)

放送時間になると父が必ず声をかけてくれたものでした。(12)

「東北うたの本」と聞くだけで、幼少の頃の夕暮れ時の情景が思い出されて、何とも言えない懐かしい気持ちになります。(21)

夕方、棚の上のラジオから流れる「東北うたの本」の時間が来るのを楽しみに待ち、頭上から聞こえる歌を正座して一緒に口ずさみ〈後略〉(30)

というように、この番組が子どもだけでなく、一家中に楽しみにされていたことが窺われる記述も多い。

5. 現代に生きる「東北うたの本」所載の歌

このように戦後復興期に学校関係者、地域の文化人、そして放送局が一丸となって行った新しい子どもの歌を作る活動は、当時の子ども達にとって印象的な番組として聴衆されていたが、近年ではこの地方では、「東北うたの本」の各曲は、どのように受け止められているのであろうか。仙台中央放送局が発行した『東北うたの本』5冊は、戦後の混乱期における発行という事

情もあり、個人所蔵を除けば、現在では宮城県図書館や仙台市市民図書館等に複写本が所蔵されている程度となってしまうている。しかし、「春のあしおと」や「仲よしの歌」が教科書教材として採用されなくなって以降も、宮城県内では何度か、『東北うたの本』所載の各曲の再録の動きが見られた。

その最初のもは、1974（昭和49）年に宮城県図書館が開催した「みやぎ児童文化のあゆみ」の展示会における『みやぎうたのほん』の編集である。この中には、「伸びるよ若芽」「仲よしの歌」など、『東北うたの本』所載の計10曲が収められていた。その前書きでは、この「東北うたの本」の活動を、「全国にさがかけて子どもの歌声運動の花を咲かせた」と評価し、「東北童謡集」（『東北うたの本』第1巻の曲集名）を「注目にあたいする児童文化活動の成果」と位置づけている³⁰⁾。

その後、1980（昭和55）年には、宮城県音楽教育研究協議会が『みやぎけん ふるさとのうた』を編纂しているが、その中に、わらべうた、民謡、郷土の伝承芸能と並んでふるさとの愛唱歌として『東北うたの本』から10曲が選曲されていた³¹⁾。この本の編纂には、「東北うたの本」の番組最盛期に市内小学校に在職していた曾我道雄や三浦節夫をはじめとして、教育委員会や県内各地の学校関係者が関わっていた。従って、発行後、各地の小学校でこの歌集が副教材として使用されたと考えられる。

また、1993（平成5）年になると、宮城県児童福祉課が、国際童謡フェスティバル記念として『みやぎの歌』を編纂しているが、この中には「みんな元気な私達」「春の足おと」「ワンガマワシ」「胡桃」「おくれ雁」などが所収されていた³²⁾。そして、例えば仙台に生まれ、「郷土特有な児童芸術運動」³³⁾を展開してきた「胡桃」の作曲者佐藤長助を「よい詩に逢い、よい作曲をする感動の持ち主、詩のわかる音楽家」³⁴⁾と記述していたように、郷土の作曲家の紹介にも努めていた。

さらに、2007（平成19）年には、県音楽教育研究協議会が、「最近では歌われる機会がなく、曲を知らない音楽教員も増えた」³⁵⁾と言われる「仲よしの歌」の練習用CDを制作し、県内の小中学校に配布するという試みも行われたが³⁶⁾、この背景には、当地で育まれた音楽文化を次代に引き継ぐという趣旨があったと推察される。

6. おわりに

以上、考察してきたように仙台地方では戦前からの児童文化活動を基盤として、終戦直後から、東北一円に影響を及ぼすことになる「東北うたの本」の番組作りが進められた。企画自体が終戦の年の暮に立ち上がり、翌年の1月末には既に第一作が披露されていたこ

とに、この活動に関わった人々の意気込みが感じられる。この時期のこうした学校、文化人、放送局を巻き込んだ大がかりな活動は、全国的に見ても例のない特筆すべきものであると考える。半沢は筆者のインタビューの中で、東京からほどよく離れた仙台ならではの活動であったという趣旨の感想を語っているが、それも戦前からの素地の上に可能であったことと言える。

「東北うたの本」の聴取世代が高齢化を迎え、こうした活動がかつて仙台にあったことを伝えることが困難になって来ている今だからこそ、県音楽教育研究協議会が行ったCD制作のような手段などを使って、児童文化を継承していくことが考えられるべき時ではなからうか。問8の自由記述の中に、

当時を思い出しながら今は遠く離れた孫と電話で一緒に歌っています。(11)

「東北うたの本」の何曲か、今、孫達が歌ってます。(14)

というように、世代を超えて同じ曲を歌い合う姿が見られたが、こうして東北にちなんだ歌を伝え合っていくことこそが、かつて子どもの新しい歌作りに意欲的に取り組んだ人々の一番願っていたことであろうと考える。

謝辞

本研究の推進にあたっては「おてんとさんの会」会長の富田博先生からたくさんの資料ご提示、ならびにご教示を頂きました。心より感謝申し上げます。また番組放送直後から長くこの番組のディレクターをつとめられた半沢和郎氏からは、資料としては残ってはいない放送や合唱団に関する多くの逸話を伺うことができました。創設期から合唱団のメンバーであった三浦志寿子氏と小野寺禮子氏からは、子どもの視点から当時の放送の様子を伺うことができました。特に聴取世代へのアンケートに関しては、三浦氏に大変お世話になりました。また前回の研究時より曾我道雄先生には引き続き、合唱団の方々をご紹介頂くなど大変お世話になりました。皆様心よりお礼申し上げます。

付記

本研究は、平成18年度の放送文化基金助成による「仙台放送局『東北うたの本』の音楽文化史的意義に関する研究」の研究成果の一部を公表するものである。

なお、本論中では、番組名を「東北うたの本」、そこで放送された各曲を所収した曲集を『東北うたの本』として表記した。

註

- 1) 拙稿「『東北うたの本』と仙台放送児童合唱団 ―戦後の児童文化育成と学校音楽教育における意義―」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.15 2005年参照

- 2) 富田博「豊かな児童文化を育てた戦後のおてんとさん活動」
(第3回おてんとさん児童文化講座での講演記録) 2008 (平成20)年1月19日 仙台文学館(筆者は富田氏から直接、この講演記録をいただき資料として使用している。)
- 3) 「東北文芸協会『覚え書』」Qの会編『仙台あ・ら・かると』
1968 (昭和43)年8月 宝文堂 p.221
- 4) 同上
- 5) 「正しき世界観へ 東北文芸家協会新発足」『河北新報』第
17593号 1945 (昭和20)年11月6日 第2面
- 6) 朝下忠「戦後の文芸復興」註3)と同書 p.44
- 7) 同上
- 8) 「大川仙台放送部長の新構想 “官製放送”を脱却 番組編
成に東北色を」『河北新報』第17562号 1945 (昭和20)
年10月6日 第2面
- 9) 本論文では、原資料や富田氏の講演記録などに基づき、
引用箇所に応じて、「小国民」及び、「少国民」の両方の表
記を用いることとする。
- 10) 註2)に同じ
- 11) 註3)に同じ p.222
- 12) 註2)に同じ
- 13) 同上
- 14) 永野の補作については、曲集『東北童謡集 第一巻』にも
記載されていない。
- 15) 註2)に同じ
- 16) 『河北新報』第17673号 1946 (昭和21)年1月27日
第2面
- 17) 「HKに可愛い合唱団生る」『河北新報』第17637号
1945 (昭和20)年12月20日 第2面
- 18) 註1)参照 p.99
- 19) 『河北新報』第17687号 1946 (昭和21)年2月10日
第2面
- 20) 『河北新報』第17605号 1945 (昭和20)年11月18日
第2面
- 21) 『河北新報』第17626号 1945 (昭和20)年12月9日
第2面
- 22) 澤崎定之「音楽と生活」『新岩手日報』第2992号 1946 (昭
和21)年2月24日 第2面
- 23) 『新岩手日報』第3033号 1946 (昭和21)年4月7日 第
2面
- 24) 『東奥日報』第19622号 1947 (昭和22)年1月25日
第2面 「ドントまつり」は『東北うたの本』第2巻所収の
曲
- 25) 『東奥日報』第19768号 1947 (昭和22)年6月21日
第2面など
- 26) 鹿野正夫「あしかけ25年この道ひとすじに」酒田市中央
公民館音楽子ども会編『定期発表会30回記念誌 うたご
えは流れて』1985 (昭和60)年3月 酒田市中央公民館
p.6
- 27) 「34年のあゆみ」同上書 pp.10-11
- 28) インタビューは、2007 (平成19)年12月15日(土)に
仙台市内のホテルメトロポリタン仙台において行われた。
また半沢氏は同様の内容を筆者からの問い合わせの書面
にも記されている。
- 29) 「『ホン』も間に合いません 『一ネンセイ』にさびしい春」
『河北新報』第17733号 1946 (昭和21)年3月28日 第
2面
- 30) 宮城県図書館編／発行『みやぎうたのほん』1974 (昭和
49)年
- 31) 宮城県音楽教育研究協議会編『みやぎけん ふるさとのう
た 一小学校版一』1980 (昭和55)年 東京芸術社
- 32) 宮城県児童福祉課編／発行『みやぎの歌』1993 (平成5)
年
- 33) 同上 p.12
- 34) 同上
- 35) 「故海鋒さん『仲よしの歌』再び光」『河北新報』第39685
号 2007 (平成19)年3月8日 夕刊 第1面
- 36) 同上